

# 山海関孟姜女関連調査報告

松 田 徹

## はじめに

万里の長城は、古来漢民族にとっては異境との境界線であった。中でも中国河北省秦皇島市山海関区にある山海関は、中国東北地方への関門であり、辺境というイメージを濃厚に持つ場所であった。この地に特別なイメージを喚起させるものとして、いわゆる「孟姜女説話」がある。現在、「孟姜女説話」と関連のあるという地点が、実は中国の各処に存在する。特に説話の発端となる孟姜女の故郷は、山海関から遠く離れた地域（湖南省澧県、陝西省銅川市、上海市松江區など）に設定されている。しかし、山海関の孟姜女廟は、古くから山海関の観光スポットとして有名であり、この伝説の聖地と言っても過言ではないだろう。2010年8月、筆者は23年ぶりに同地を訪れる機会を得た（注1）。以下は、その折りの簡単な報告である。

## 1. 瀋陽から山海関へ

2010年8月22日、山海関への日帰り調査を実施した。調査当日、中国北部～東北地域は天候不順で、瀋陽付近も前日から豪雨に見舞われていた。当日の天候が危ぶまれたが、瀋陽北駅8時58分発の北京行きD10次列車（注2）は、幸い定刻に出発した。座席は一等座（グリーン席）、運賃は特急料金込みで144元（約1800円）だった。列車は最高時速245kmを發揮し、2分遅れの11時4分に山海関駅へと到着した。

駅を出ると小雨が降っていた。駅前を撮影しているとタクシーの客引きの中年女性が声をかけてきた。話を聞くと、孟姜女など山海関周辺の観光スポットを半日回ってチャーター代60元（約750円）という。距離的にはたいしたことがないものの、相当な待ち時間が生ずるはずなのに60元とはかなり安い。何度も確認したが、その値段だというので利用することにした（注3）。

まず手始めに訪れたところが山海関長城文化奇観園である。ここは比較的新しく作られた観光スポットで、山海関から嘉子峪関に至る長城にまつわる歴史的物語をハリボテと人形で再現している。例によって秦の始皇帝による長城修築から始まり、唐の時代まで延々と長城関係の展示が続くが、見学者もまばらな上、照明が暗く人形も粗雑な造りで、それがまた妙に生々しくお化け屋敷のようだった。当然ながら、「姜女動天」というタイトルがついた孟姜女の塑像もあった。別館では、「敦煌佛光」と称する敦煌石窟のハリボテが迷路のようになっていた。ここも荘厳な仏教遺跡という気配は微塵もなく、先の長城関連の展示と合わせても、入場料30元（約380円）はかなり高額な感があった。どおりで見学者が少なく閑散としていたはずである。

その後、隣接する老龍頭へ徒歩で入場した。入場料が50元（約630円）と高額にもかかわらず、明の長城の東の起点として有名な場所であるため、先ほどの文化奇観園をはるかに上回る混雑ぶりであった。20数年前に訪れた際には、一部崩れた長城の先端部がそのまま渤海に没しているという風情であったが、すっかり観光地化され、周辺も最近の中国によく見られる史跡テーマパークのように整備されていた（巻末写真1）。

## 2. 孟姜廟

時間がないので昼食もとらず、老龍頭から直接孟姜女廟へ向かった。車に乗り20分弱で着いたが、途中の道は整備中でかなりの悪路であった。これから観光資源として整備されようとしているのだろうが、山海関市街地内の観光スポットからはやや取り残されているような印象を受けた。

車で一気に高台を上ったところに孟姜女廟入口があった。入場料は25元（約320円）。上海の地下鉄の改札口のような金属バーの入場口が設置されていたが（巻末写真2）、108段の階段を登って行った先にある「貞女祠」という額が掛った山門なども20数年前となら変化はなかった。この廟自体は宋以前建てられ、現在の建物は明の万暦22年（1594年）に再建されたものだという。中国で最初に5A級を取得した旅游地区の一つとのことである。山門をくぐると孟姜女殿がある。中に彩色を施された

孟姜女の塑像が、「萬古流芳」という扁額の下に安置されている。その前には線香が焚かれ、賽銭箱が置かれてあった（巻末写真3）。いわゆる「孟姜女説話」が、今日でも広く人々に知られている一つの証だと見た。

この孟姜女殿と後方の観音殿のある区域以外は、新たな観光スポットとして近年整備されている。まず、孟姜女が一晩に何度も訪れたため足跡が付いたという望夫石があり、その隣の石には清の乾隆帝の詩が刻まれている（注4および巻末写真4）。

また、高さ3.2mの孟姜女「跳海銘貞」像や孟姜女が瓢箪から生まれた説話にもとづいた孟姜女「出生像」などがある。石段を下りた先の池に立つ孟姜女「海眼像」（巻末写真5）を経ると「孟姜女苑」に至る。ここは、いふなれば「孟姜女説話テーマパーク」といった雰囲気である。

### 3. 孟姜女苑

今回の孟姜女廟で一番驚かされたのが、この「孟姜女苑」である。これは孟姜女説話に基づいて20近くの情景を再現したもので、1992年9月に造られたようだ。順路に沿って進むと、あまり出来の良いとは言えぬ孟姜女や夫などの塑像が解説のプレートとともに配置され、孟姜女説話のストーリーが展開される。一般の人々に対し、どのようにこの説話を紹介しようとしているのか窺い知ることが出来、まことに有意義であった。

プレートのタイトルは以下のとおりだが、タイトル・解説とも中国語と英語しか表記はなかった。タイトルの後の日本語訳は便宜的につけたものである。

- ①紫燕銜籽「燕が種を宿す」
- ②姜女出生「姜女の出生」
- ③閨房才女「深窓の佳人」
- ④捉拿杞良「杞良逮捕」
- ⑤蓮池相会「蓮池での出会い」
- ⑥洞房花燭「華燭の典」
- ⑦夫妻兩散「夫婦離散」
- ⑧夜制寒衣「夜、冬着を作る」

- ⑨長亭送別「城外での別れ」
- ⑩江畔遇險「長江河畔での遭難」
- ⑪異域親人「異境の恩人」
- ⑫緑林相送「盗賊たちの見送り」
- ⑬過関悲曲「関所越えの悲歌」
- ⑭望夫凹石「夫を望んで石が凹む」(注5)
- ⑮哭倒長城「慟哭して長城倒壊」
- ⑯秦皇逼婚「始皇帝結婚を迫る」
- ⑰厚葬杞良「厚く杞良を葬る」
- ⑱跳海殉情「愛のために入水自殺する」

孟姜女説話には、数多くのバリエーションがあり、それらの説話を一本のストーリーにまとめるのは苦労したと思われる(注6)。それらの説話の中でも、比較的多く見られる孟姜女の出生譚をここでは採用している。すなわち、孟家、姜家という二つの家に跨って生えた瓢箪から孟姜女が生まれたとするものだ。

なお、プレートの解説では、家は松江の孟家荘にあるという設定になっている。しかし、これは数ある孟姜女の故郷候補の一つにしかすぎず、根拠があるわけではない。孟家の前で瓢箪の飾り物を売っていたのが御愛嬌であった。

次に、孟姜女と范杞良の出会いと結婚が描かれる。孟姜女説話では、夫の名前は、范杞良・万喜良など異同があるが、解説プレートでは「范杞良」と表記されていた。以下、夫范杞良が秦の兵士により長城の労役に駆り出される場面、夫の身を案じて冬着寒衣を作る場面、両親(孟家・姜家)との別れなど、孟姜女説話ではポピュラーなストーリーが続き、彼女は山海関へ旅立つ。

その後が、いわばこのテーマパークの真骨頂で、孟姜女が如何に苦難の道中を歩んだかを物語るエピソードが意図的にちりばめられている。すなわち、途中で大鱷に襲われる(巻末写真6)、道中病に倒れ親切な農婦から手厚い看護を受ける、盗賊に拉致されたが境遇を同情され釈放される、ある関所で通行を阻まれたが悲憤の歌を歌い役人を感動させ通行

を許可される場面（注7）等々である。

孟姜女が山海関へ到達すると、いよいよ説話のクライマックスである。夫の死を知って慟哭した孟姜女が万里の長城を倒壊させる、長城を倒壊させたため逮捕され始皇帝の前に引き出され妾となることを求められる、そして、貞節を守って自殺するという展開になるはずだ。この⑭「望夫凹石」以降は、洞窟状に穿たれた「地下宮殿」内に展示してあるらしい。ところが、なんとシャッターが下ろされていて見学出来なくなっていた。肝心のエピソードが見られないではまさに竜頭蛇尾である。「孟姜女苑」自体も、多くの観光客でにぎわっていた老龍頭に比べるとさびしい限りで、そういえば、園内の孟姜女たちの塑像も傷みが激しく、保管状態は良くなかった。孟姜女の行く末が思いやられた。

ともあれ、こうして孟姜女の苦難の道を、異なるバリエーションの説話から抽出して接ぎ合わせ、ことさら強調して見せていたところに新鮮さを感じた。孟姜女というと、始皇帝を代表する封建勢力に反抗する女英雄という紋切り型のイメージが強いのではないかと思っていたからだ。旧来の社会主義的イデオロギーを前面に出すよりも、より普遍的な夫婦愛を強調した方が現在では一般の受けがよいのだろう。

## おわりに

孟姜女廟を一通り見学し終わって、なにか記念品でもないかと探したが、土産物店に売っているのは、ロシア物産か山海関のありふれた記念品、あるいは果物などで、孟姜女に関わるものは見つからなかった。

近年中国各地で観光資源の開発が急速に進みつつあり、また「ご当地」グッズの商品開発も盛んである。孟姜女関連でも、ブームに便乗していくつもの商品が開発されてきている（注8）。ある意味孟姜女伝説の聖地ともいえるこの山海関孟姜女廟で、特別な孟姜女グッズが見当たらなかったのは意外であった。あまりにも商売っ気がなく、あっさりした印象であった。

商魂に長けた中国人が、孟姜女という格好の観光資源を無駄にするような愚を犯すとは思えない。変化の激しい中国のことであるから、数年

後には面目一新している可能性もある。孟姜女廟の背景にある「孟姜女伝説」が、長く中国の民衆の間に語り継がれ、長城のイメージ、あるいは、山海関のイメージに一定の影響を与え続けて来たことは否定できないからである。

注：

1. 2010年8月20日～26日、麗澤大学経済社会総合センターの共同研究プロジェクト「中国山海関地域をめぐる歴史社会研究」の予算により、本学外国語学部堤和彦准教授とともに、中国瀋陽、遼陽、撫順、山海関において、文物、文化財の現状、および、展示方法に関する現地調査を行った。本報告はその成果の一部である。この度の現地調査に関して、その全てにわたりご協力をいただいたプロジェクトリーダーである本学外国語学部櫻井良樹教授、出張事務をご担当いただいた本学プラザ事務課研究センター事務室の鈴木敦子氏を始めとする事務方諸氏に感謝申し上げたい。
2. Dは动车组旅游列车的略称。機関車牽引ではない列車を指し、日本の新幹線車両「E2系」をベースに中国が国産化した高速列車で、いわゆる「和諧号」である。2010年8月時点で、北京－瀋陽北間は一日上下それぞれ11本ずつ運行している。ただし、山海関に停車するのは一日に上下1本ずつしかない。したがって、瀋陽への帰途は、T11次という広州からの長距離特急に乗車せざるを得なかった。ちなみに「和諧号」は、隣の秦皇島にはそれぞれ5～6本ずつ停車している。  
《2010.07 全国铁路旅客列车时刻表》铁道部运输局 中国铁道出版社 参照。
3. 山海関長城文化奇観園・老龍頭→孟姜女廟→王家大院→天下第一関と回って合計所要時間約6時間であったが、60元ちょうどで領収書も発行してくれた。  
実はこれには真に巧みなカラクリがあり、我々が見学している間、タクシーはただ漫然と待っているわけではなかった。この王さんという中年女性は、夫である運転手と携帯で常に連絡を取り合っていた。王さんのみが我々を待っていて、車が必要になると携帯で夫を呼ぶという次第である。待ち時間を無駄にせず営業を続けていた夫のタクシーは、妻からの連絡を受けるとすぐ車を回す、という次第である。比較的狭い山海関エリアのみを営業区域としているためこのような芸当ができるのであろう。車は5分もかからず到着するか、あるいは頃合いを見計らって待っていてくれたので、こちらも無駄な時間はなかった。特に孟姜女廟は市街区域からは離れており、タクシーを利用するしかないが、帰りのタクシーを捨てるかどうかという不安から解放され大変助かった。

4. 乾隆8年10月16日(1743年12月1日)、乾隆帝がこの地に立ち寄った時に詠んだものという。詩の全文は以下の通りである。
- 凄風秃樹吼斜陽，尚作悲聲吊乃郎。  
千古無心誇節義，一身有死為綱常。  
由來此日稱姜女，盡道當年哭杞梁。  
常見秉彝公懿好，訛傳是處也無妨。
- 康群《孟姜女廟詩文選注(内部資料)》山海関区孟姜女學術研討會 山海関区孟姜女廟景区管理处編 2004年 参照。
5. 本文で後述するように、⑭～⑱の部分は、直に見ることが出来なかったので、「地下宮殿」入口のプレート解説、および、  
**【百度空間 文墨網 河北秦皇島孟姜女廟导游詞】**  
<http://hi.baidu.com/wmnet/blog/item/0e57b0020189bd7c3912bbbc.html>  
を参照した。
6. 現地で購入した、秦皇島市地方辦公室 山海関区孟姜女學術研討會 山海関区孟姜女廟景区管理处《孟姜女的传说(内部資料)》(出版年不詳)にも多くの説話が収録されている。その他、近年刊行された、渡辺明次編訳『孟姜女口承伝説集』日本僑報社2008年4月 には中国各地の孟姜女説が整理されている。
7. 孟姜女が蘇州の滸墅関を通過する時のエピソードで、複数の説話に見られる。注6前掲両書参照。
8. たとえば、孟姜女の故郷の一つとされる陝西省銅川市では「孟姜紅」というブランドの桃を売り出して好評を博しているという。  
**【銅川接待網】**  
[http://jdw.tongchuan.gov.cn/admin/pub\\_newsshow.asp?id=1000021&chid=100007](http://jdw.tongchuan.gov.cn/admin/pub_newsshow.asp?id=1000021&chid=100007) 参照。





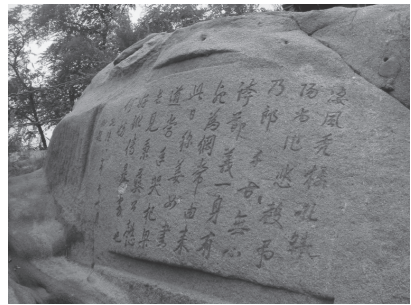
1. すっかり観光地化された老龍頭



2. 孟姜女廟入口



3. 孟姜女殿



4. 清の乾隆帝の詩



5. 孟姜女「海眼像」



6. 大鱷に襲われる孟姜女(孟姜女苑)